だから、早期発見が大切！
がんが治りやすい

病期別の10年相対生存率をみてみよう

がんは治療をして5年間、再発しなければ「治った」とみなされており、治療でどれくらい治るか（生命が救えるか）を示す指標として、診断されてから5年後に生存している人の割合である5年相対生存率が用いられています。

ただし、医療の進歩によって再発しても5年以上、生存する人が増えていることから、新たな指標として10年相対生存率が公表されました。診断されてから10年後も生存している人の割合が高ければ、治る可能性が高いといえます。

病期－がんの進行度を知る指標

「病期」とは、がんの進行度を客観的に知るための指標のことで、治療方針を立てるうえで、重要な要素となります。がんの種類によって病期の分類は異なりますが、代表的なものに、国際対がん連合（UICC）が用いる「TNM分類」があります※。

- がんがどのくらいの大きさになっているか（T因子）
- 周辺のリンパ節に転移しているか（N因子）
- 別の臓器への転移はあるか（M因子）

これらの3要素の組み合わせによって、0～Ⅳ期の5段階に分類されます。0期に近いほどがんが小さくとどまっている状態、Ⅳ期に近づくほど大きく広がっている状態（進行がん）となります。

※その他、日本独自の規約として「癌取り扱い規約分類」等があります。

10年相対生存率のここをチェック

病期による10年相対生存率の違い

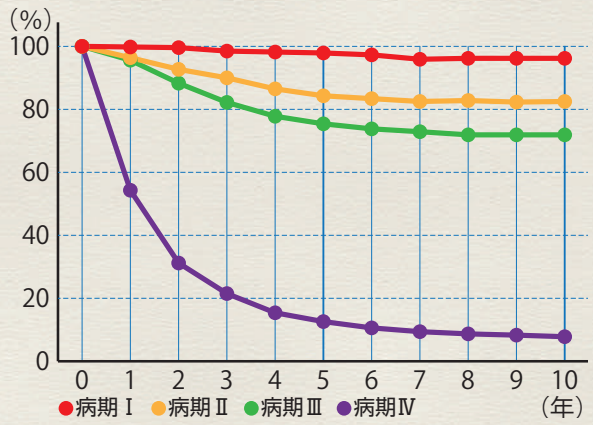
病期が早い（数字が小さい）ほど、10年後も生存している割合が高い。

5年以降の折れ線グラフの傾斜

5年以降、折れ線グラフがほぼ横一直線で生存率が下がらなければ治る可能性が高い。

※全国がん（成人病）センター協議会では、「0期」の生存率は算定していません。
※10年相対生存率は1999年から2003年にがんと診断された人を追跡したもの。10年前を起点とする古いデータであるため、現時点でがんと診断された場合の生存率は、より改善していることが見込まれます。

大腸がんの10年相対生存率



- ▶病期Ⅰならほぼ完治。病期Ⅱ・Ⅲでも10年相対生存率が70～80%で、治りやすい。
- ▶5年以降は生存率がほとんど下がらず安定しているため、5年をすぎればひと安心。
- ▶病期Ⅳになると10年相対生存率は約10%。

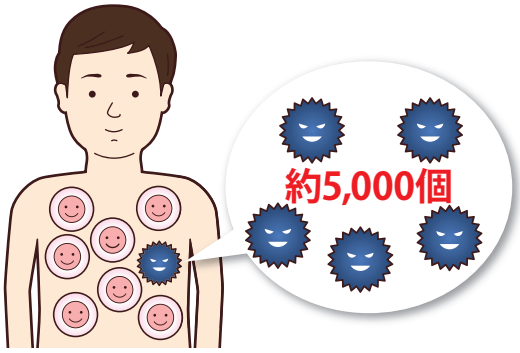
健康な人でも毎日がん細胞はできており免疫機能も万能ではない

遺伝子のコピーミスをまねくのは、たばこの煙や不健康な生活習慣、ウイルス・細菌※、加齢などの身近なもので、健康な人でも毎日約5,000個のがん細胞ができているといわれています。それでもがんにならないのは、免疫細胞ががん細胞をみつけだして攻撃しているからです。

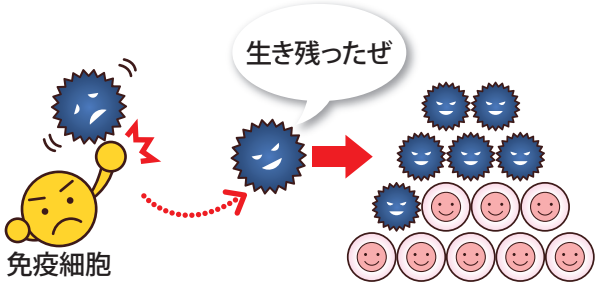
しかし、免疫機能も万能ではなく、がん細胞が増えすぎたり、不規則な生活やストレス、老化などで免疫力が低下していると攻撃が追いつかず、がん細胞が生き残ります。これが増殖してかたまりとなったものが「がん（腫瘍）」です。

※がんの形成にかかわっているウイルスや細菌のこと。

がん細胞は毎日約5,000個できている



免疫力の低下などでがん細胞が生き残り、増殖して「がん」になる

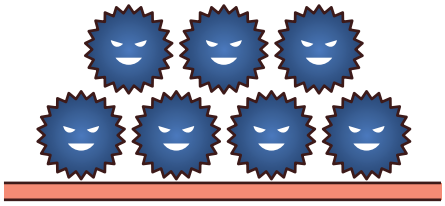


がん細胞は最初できた場所にとどまっているが進行すると全身に散らばる

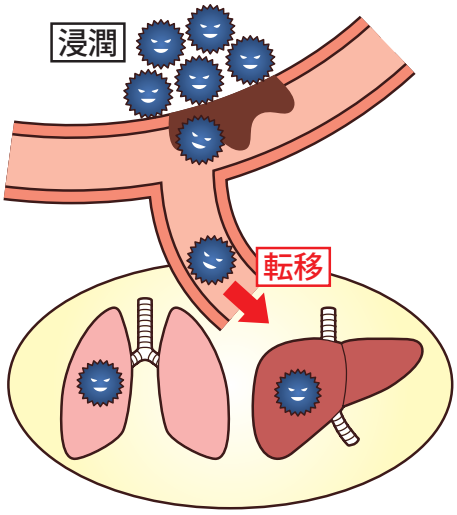
がん細胞は不死身で、無制限に増えたり、広がったりする性質がありますが、最初はできた場所にとどまっています。この段階を「早期がん」といい、手術などでがん細胞を全滅させられるため、完治の可能性が高いです。

しかし、がんが進行すると、周りの組織や器官にも広がり（浸潤）、リンパ液や血液の流れに乗ってほかの臓器に移動して増殖（転移）します。こうなった段階を「進行がん」といい、がん細胞が全身に散らばってしまうため、すべてをみつけだして全滅させることができません。そのため、治ったようにみえても再びがんが出現する「再発」が起こりやすく、完治がむずかしくなります。

早期がんはがん細胞ができた場所にとどまっている段階



進行がんは「浸潤」や「転移」をしてがん細胞が全身に散らばってしまった段階



がんは早期がんで発見することが大事